
塔の下の飛べない竜と少年の話 (仮)

粒子分解

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

塔の下に飛べない竜と少年の話（仮）

【Nコード】

N2504L

【作者名】

粒子分解

【あらすじ】

昔、竜は王国の王子と空を旅した。

しかし、王国はいつしか滅び竜だけが塔に残った。

少年は竜に憧れていた。

その反面その存在を否定もしていた。

以下めんどくさいので略！

自分はダークファンタジーがよく分かっていません。あと、ときおり理不尽な展開になるときもあります。十ちよつとぐろい時があります。そうのが苦手な人は帰ってください。おねがしいたしますう。※文章力もないです。なにか変な部分に気づいた時はいつてください！！物凄く方向に向かっていることを今感じた！けど、大丈夫：だと思ふ

竜11 プロローグ（前書き）

えーと、これは作者の妄想の世界です。

正直ダークファンタジーがなんなのか分かりません。

けど、理不尽ならそれでいよね？

竜1 プロローグ

今日も清々しい風が、生い茂った草原に波を立たせる。周りを見渡すとそこには、大きくそびえ立つ、塔があった。

その塔は、王国の城の一部だったそうだ。しかし、その王国はとうに滅び、その塔には、竜が住んでいるという。

竜は、昔、その王国の王子と一緒に旅をしたそうだ。しかし、竜と人では生命の次元が違いすぎた。王子は何時しか老いていき、やがて国は滅んだ。滅んだものは、終わりを辿るのみ、そして竜は独りになった。

竜は、塔の城門から、顔を少し伸ばし、生い茂った草原の向こうに虚ろになってしまった、目を向ける。

「もう一度…空を飛びたい。」

竜は、飛べなくなっていた。竜は成長をしたら、半永久的な命を得る、身体も老いることはない。しかし、契約を結んだ竜はちがう。竜は昔、王子と契約を交わし、進化する翼を手に入れる。

契約とは、二つの命を繋げ、共有すること。契約を結んでいるときは、完全に一心同体になる。人は契約を結ぶことによって、強靱な肉体を得る。竜は進化する翼を手にする事が出来る、竜は本来翼をもたない、契約を結ぶことによって、竜は翼を手に入れる。しかしその二つには、大きなリスクがある。

人は、強靱な肉体を得る代わりに、身体の一部の機能が著しく低下する。たいていは、視力、聴力、声、を失くす。

竜は、進化する翼を得る代わりに、人との一心同体になるがゆえに、大幅に痛みに弱くなる。

そして、どちらかの命が尽きると、その二つの命は、失われる。

しかし、塔の竜は違っていた。その竜はまだ、生きている。契約は、契約を破棄することで、その二つを失う代わりに、彼らのいわゆる、「共有された命」は、一つ一つの別れたものになる。

力を得る代わりに、自由からだをうしない、自由からだを捨てる代わりに力を得る。

また、竜は思う「もう一度そらを飛びたい。」

ふと、竜は急に眠りについた。

竜11 プロローグ（後書き）

まだまだ話はプロローグ

少年11 プロローグ（前書き）

まだまだプロローグ

少年Ⅰ 1 プロローグ

少年は、城下の町を歩いていた。今日も、町は賑やかで、とても活気に溢れていた。

少年は、ひとつの店に立ち寄り、いい香りのするりんごを見ていた、少し痛んでいたが、店の人に了承を得て、ひとつかじりした。そのりんごは、とっても美味しかった。少年はそのりんごを三つほど買って、その店を出た。

少し、ほかのものも見回してみたが、特に欲しい物はなかったので、自分の家路へと足を運んだ。

「つまらないな」

少年はそう小さく、自分の部屋でつぶやいた。

ここは、「アンヘル」（つづりはAngel）と呼ばれる町、天使の町という意味らしい。

正直そんなことには微塵も興味を持っていない。だけど、不思議だとは思う、大体なんでアンヘルと読むのが、一番疑問だ。まあ、そんなことはどうでもいいことなのだ、昔からここに住んでいる人はそんなことを口には出さないし、別に教えてといっている人も見たことはない。

あ、そうだ、一樣、自己紹介、まあ、誰に言ってるのって話になるけど一樣、自己紹介。

僕の名前は、ユーリ・カイクムⅡディア

みんなからはディアって呼ばれてる。…自分的にはユーリって呼ばれたい。けど、どうでもいいことだな。あ、ちなみに16歳、もうすぐ、成人の儀式を迎えて、立派な大人になる。

その、成人の儀式の内容は、ダンジョン、いわゆる、えーと…：迷宮？見たいのに隠されたなんというか…：宝物を探しにいつてこいだそうだな。あ、あれ？なんか後半変なのになってない？いや、なっていない。

儀式は来週に開催されるそうだな、はつきり言って、帰宅などない、理由は簡単。「めんどくさい」からだ。

はあ…と大きなあくびをして、ベッドに潜り込んだ。

ディアは、すぐ横にある戸棚から、一冊の本を取り出した。「塔の騎士」その本の表紙には大きくそう書いてあった。

僕はこの本を、数十回か読んだ。この本はとっても大事にしている。なぜなら、これは、おじいちゃんからもらった宝物だからだ。本に書かれていることは題名の塔の騎士と竜の物語、王国の騎士が竜に跨り、空を駆け、旅をし、時には涙あり笑いありの楽しい話だ。

竜は、本当にいたらしい、いまでも生きていると、おじいちゃんは言っていた。

僕も、昔本当にいると信じてた時もあった、まあ、すぐにそんなの嘘だって分かったけど。

けど、嘘だって決めつけちゃいけないのかもしれない、そう言い切れない理由がこの町にある。例の儀式の宝物と言うのは、竜の鱗と羽根らしい、この町の大人は皆それを首に下げている。見た目は…トカゲのうろこそっくりなのだが、なんというか大きいのだ。羽根も

どう見ても皮でできていた。

まあ：作ろうと思えばできそうな代物なのだが。

深いことを考えるのを止めて、月明かりが照らす部屋で、ディアはいつの間にかすやすやと整った、寝息を立てて眠ってしまった。

夜が明け、日が差し始める、午前5時ごろ。今日は霧が少しかかっている、少しばかり肌寒い。ディアはまだ、眠っていた。

町はだんだんと、明るくなり、自分たちの店の準備をし始めている者もいた。

ディアの狭い、一人部屋。その中央の壁には大きな時計が立てかけられていた。時計の秒針は少しずれていて、15分を差していた。大きく、太陽が、町を夕日のような色で染め上げている。トーン、ディアの時計が15分早い、6時を告げた。

「：あ、：朝かあ：。」

ディアはそう呟きながら、大きく背伸びをした。

「ディアー！？もう朝よ！早く起きてきてらっしゃい！！」

ああ、分かったよ、と返事をして僕は、部屋から出ていき、階段を降りてすぐ横にある、キッチンへと足を踏み入れた。

「もう、時間ないから、早くご飯食べて学校に行ってらっしゃい！！」

さつきから、「近所迷惑なんじゃないか？」と思う程に結構大きな声で解りきっていることをちい言ってくるのは無論、お察しの通り僕のお母さんだ。

僕は、左右に90度ずつ曲がる、木製の椅子に腰を掛け、お母さん

が作った朝食をだるーく食べた。

食べ終えて、食器を台所へ。着替えを済ませて、忘れ物を点検してから、ブーツのひもをギュツと上げて、僕は玄関を出た。

歩き出して、しばらくすると大きな門が現れた。これはディアのう学校、「聖・魔術学校」

何ともふざけているような名前だ、特に聖なのか魔なのか、判別がつかない。

ディアはこの学校の中級階級の2年生。

聖・魔術学校は歴史が古い学校で、まだ王国があった時からあったらしい。この町は何かと王国が好きだな、とか思いつつ、ディアは門をくぐった。

この学校には、階段がない。2年生からは、魔術「浮き風」を使わなくては、行けない。なので、1年生は一階にある。（因みに、一年生の進級試験はこの、浮き風で自分を4メートルほど飛ばすことが出来れば合格。でないと二階に上がれない。まあ、出来ない奴などいないが。）

「ほい」

ディアは腰のベルトに差した杖をとりだし、「風よ…！」と念じた。彼の身体はふわりと浮きあがり。…とはいかない、それはそうだ。現実の魔法は某RPGのように唱えただけでは、なんの意味もない。ましてや、ただ念じただけでつかえただけでは魔術の意味がない。

魔術を使うには触媒が必要であり。（触媒とは、…：触媒とは…：知らん。僕は普段鳥の羽を使う）魔法陣を描き、（星の中に星、そし

て周りを囲む）：説明がだるい。

まあ、とにかく、魔法を唱えるだけでは発動できない。

あーあ、もう、羽根が16枚しかないや、とディアは呟きながら、ふわふわ二階へと上がっていく。途中バランスを崩し危うく、床に突っ伏すところだった。何とか体制を立て直して、すた、と床に足を置いた。

相変わらず広い廊下だ。ディアはそんなことを思いながら徐に教室へと足を運ぶ。

ドーン、大きな音が廊下に響き渡る。これはチャイむか何かと一緒にだ。

この音を聞いた、他の生徒たちは一斉にダッシュ。はやくはやく、と、ちらほら聞こえる。まだ、予玲だって言うのに、まったく、そう思っていると、生徒が一人扉の前で転んだ。

ぷふ、と笑う声もするが、僕は生憎善良的に出来ているらしい。ああいうのをみると助けずにはいられない。

ディアは、転んだ生徒のもとに足を運び、手を差し伸ばす。

「おうい、大丈夫か？まだ、予玲のチャイムなんだし、焦ることなはいよ。ほら、手貸して、立って。」

「あ、ありが・・・と」

おぼつかない返事をしたそいつは、アレックス・マクラウドⅡマナ。幼馴染だ。うん。名前からして女の子だってことは察しにくいが、彼女は女子だ。彼女は女子だって…変ないい方だな。コイツは成績優秀で運動神経もそこそこで、昔は明るかったんだけど…いつの間

にか根暗野郎になってしまった。あと、僕的には可愛いと思っ
たりしていたりする…。はは。…正直好き…いや無い。

ディアはマナの手をとって、教室に入っていく。

少年ー1 プロローグ（後書き）

次回から、ちゃんとした話になるかも。

スペル・1 いつもの風景（前書き）

ちよつと、なぜか長くなりました。次からは10000〜25000文字位で安定させたいです。あと、意味不明な説明のせいで大変醜いです…。そこらへんご了承ください。あは☆

スperl・1 いつもの風景

今日の授業は、魔法詠唱短縮術と、魔砲・矢狩まほう・やかり（後者は略してマホカリ、前者は詠術と皆からは呼ばれている。いや、うん。そう呼んでいる。）魔法詠唱短縮術は結構面倒で、短縮されてるのかよく解らない。しかし、先生曰く「なれば、通常詠唱より早くてとっさにだせる」らしい。結局はどこぞのRPGバリのことは出来るっぽい。（出来る奴は、校長意外見たことないけど。）みんなそれぞれの触媒を右手に持ち、「浮き風」を唱える。まずは通常詠唱。先生が見本を見せる。手に持った触媒を前にかざし大きな陣を空中になぞるように描く。その陣は、星の中に星それを円で囲む。という陣。もつとも一般的で、よほどショボイ触媒か、（たとえば、雑草だとか）術者の力量が無いか以外では、出来ない奴はいない（赤子にも、教えれば出来てしまうほど。）

囲み終わると、ブワァ！と青白い陣が浮かんた。そして先生はぶつぶつ言ってる。べつに日ごろのストレスを虚空に愚痴ってる訳ではない。これが詠唱だ。浮き風の詠唱呪文（これは、コードと呼んでいる。）は「草原を波立たせる、風よ、浮かせるものはホコリだけか？風よ、我が身をも浮かせて見せよ！」だ。正直思ったことを、正直に話そう。どこの中二だ？だれだこんな耳を蟬で固めてしまいたいほどの痛すぎるセリフを考えた奴は！！どうしてこれで詠唱できんだー！！

だから、ああやって、ぶつぶつ言うのだ。まあ別に念じているだけでもOKなのだが、詠唱するのとはしないのでは、効力、つまりえーと、効果時間や、攻撃魔法だった場合はその威力が大きく変わるらしい。浮き風の場合、効果時間、浮かせるものの量（＝個数でもある）を増やせる。：らしい。これを自分以外に発動する奴はめんどくさがりやな校長くらいだ。（なぜなら、これは自分にたいして

発動する魔法であり、他の物を浮かせる魔法ではない、あと別に自分以外の対象物に発動させる通称「浮かせ風」という魔法があるからだ。」おっとかつこ内の話が大幅にズレてしまった。

詠唱を終えた先生は、もう空中に浮かびあがっている。他の魔法では手間がかかるものが多いが「浮き風」はしょぼしょぼのTheしよぼい魔法の魔法であるため余計な手間はほとんどない。

「はい、これが通常詠唱ですね？陣と詠唱でとても時間がかかってしまいすね？」

先生はバランスをとりながら、皆に向けて話している。結構必死だ。

まあ、生徒も大人しく聞いている訳でもない。皆「だりー」だとか「その前ぶりあきたー」だとか言っている。

先生は魔法を教える時はいつもこんな教え方をしてくる。とってもメンドクサイ。流石だ。女は話し方がメンドクサイすぐにでも分かりそうなことをグダグダと話し続ける。(ディアが思うには、だ。低学年の生徒に教えるならまだ分かるが、流石にこの年で低級クラス並みの教え方をされるのは感に障るし、とっても腹が立つ。そんな女担任の名前は、セイラ・モンノレイナール、独身、年齢20代前半にしか見えない30代。最近の悩みは、結婚できないこと。性格はいたって臆病、いつともびくびくして言うか覇気がない、と言うか…まあへたれた的な何かだ。そして30代とは思えないほどのピッチピチした肌。しっかり引き締まったナイスボディ。クラスの皆様「色々な意味で付き合えない女」と称されている。可哀想。なんで結婚できないんだろうね。

「そんなに…言わないでください…いい、せん、先生だって…頑張ってるんですよ？」

分かった。これだ、原因は。

ディアは先生の、「色々な意味で付き合えない女」の理由を少し知

ったのであった。

レイナールはぶつぶついながら（これは愚痴であろう）空を見上げていた。「うう」と小さくうねってこちらに顔を向けて授業を再開する。

「じゃあ、次は、詠唱を短縮したものです。短縮をするためには少し手間がかかります。みなさんは、勘がいいので分かっていると思いますが、魔法陣のストックを作ることです。このように、紙に魔法陣を書いておき、使うときに触媒で陣の真ん中をつつきます。べつに真ん中でなくても発動しますけど…」

レイナールはそういいながら、ポケットにしまっていたであろう、魔法陣のストック用のあ紙を取り出した。ちよん、と真ん中をつつくと、ぶうん、と青白い魔法陣が現れた、しかしその魔法陣は普通に作った時の魔法陣とは違い、紙に描かれた大きさと同じものが現れた。

「はい、このように小さい魔法陣に成ります。」

先生の説明はだらだら続く、聞き終えての要点は、「メリット1、とっさに発動できる。2、時間を短縮できる。デメリット1、詠唱をしていないのでその分弱い、（なので、魔法陣は小さい＝効果時間が少ない）2、ストックがないと出来ない。」だ。思ったとおりだ。こんな授業やらなくても、皆ふつうにやっている。僕は今日たまたま持ち合わせていなかったただけだ。

「はい、ではみなさんはじめてください。」

レイナールは覇気のない声で、呟くように叫んでいた。みんなはぶつぶつ会話をしながらもしっかりやっている。多分ココがこのク

ラスのいいところだとディアは思っている。レイナールもそんな生徒だからこそ教師を辞めないのだろう。

ドーン、と大きな音これはチャイムだ。一時間目終了。つぎは、マホカリの授業だ。流石にめんどくさくて棒立ちのせいで首が痛いや。

ディアは回らなくなった、首をコキコキほぐしつつ、玄関に入る。中央の廊下には大きな木製ロッカーが置いてあり。皆はここに道具や魔法書、調合辞典などを収納と言うか、置いておいている。ものすごく大きいもので、全生徒（2000人弱）の持ち物が置ける。ゆえに一階にあるのだ。（大きさは：縦15メートル、横100メートル、奥行き10メートルほど）※作者ツツコミ※これって大きいのかな？

ディアはとくになにも用意などは必要がなかったもので、顔を洗って、すぐに外に出た。外では、おバカ男児と思春期真っ盛りの青少年共が、年齢に比例することのない無邪気っぷりで鬼ごっこをやっている。ディアは元気だなあと思いつつ、圧倒的と言えるほどのスルースキルで華麗に弾丸（無邪気男児♪）を避ける。次から次へと襲い来る弾丸（みためはシトラス、リアルはウメ）をただのポストのようにかわす。そう、スタイリッシュ、その言葉以外に、ふさわしいものはなかった。――なわけがない。ディアが居たであろう、その場所周辺には白い触媒用の鳥の羽が散乱していた。

そう、ディアは大の運動音痴で、あたふたしているところを弾丸（あ、いい香：り：）共にあっさり轢かれていた。ディアはだらしなくお尻をあげ、首を折って、ペタンと、色々な意味で終わっていた。

「あはは…」

やばい、笑うことしかできない…まさか弾丸（無邪気く男児く♪）に襲われると思わなかった…。痛い…すっごく痛い…足折れてるんじゃないの…ってくらい痛い…なんなの…？

ディア（見た目出来る男）は昔からよく、巻き込まれる。いわゆる「不幸体質」と言う奴だ。ディア（内心駄目男…。）の日常はこんなことは日常茶飯事であり、起こらなかった時の方が物凄く珍しい…。程だ。「なんなの…？」とディア（運動音痴w）は心の中で大きく叫びつつ、立て直せない体制を立て直そうと、懸命にお尻を（けつう）を可愛く振り振り揺らしている。だーれも気にとめない（そう、日常茶飯事だから）今でも弾丸（あははくあの夕陽に向かってダッシュだ…！）共は、お構いなく轢きまぐる。轢きまぐる。とにかく轢きまぐる。半分泣きべそになった、ディア。

それをみじっと見ている一つの影があった。それは、マナだ。「マナはこちらを氣にかけている▼」黒く塗りつぶされた逆三角形は点滅しながら、マナの横隣りで黒い縁取りと、白い文字で書かれたメッセージ的なものが浮いている。無論、魔法の一種ではない。多分どこぞの「ち、ちかづくなー」とかなんとかいいそうな人たちの後継者と言うか、末裔というか、が発症する病気の特徴の一つとしてあるだろう、フィルターかなんかで見えているのだと思う。そわそわするマナ。「たすけたい…でも助けられない…」自分の中のくだらない乙女と葛藤中（あうう、あうあうああ）

「おうい、ディア！？大丈夫か？相変わらずのドジだなあ、これで『え、僕ってドジなの？』って超素の顔で言うんだもん天然も結構あるんだな（笑い）ほら、たった、たった…！！」

声をかけたのは、ディアの親友と呼べる存在。クローム・シュヴァルトロキ。彼はニコニコしながらディアに手を差し伸べる。

「あ、ありがとう…クシュ…」

クシュ、それはロキのあだ名だ。ロキは去年の進級試験からの友達で、ディアがドジミスをしたところ助けてやり、仲良くなった。ロキとディアの身長差は 17センチ、はたから見ると兄弟のように中が良い。あだ名の理由は、出会ったときにくしゃみをしていたから。（クロームとシュヴァルトで略してクシュという説も）

ディアはロキの手を掴み、先ず、上体を起こしてもらってから、やっと立ち上がった。

ドーン、チャイムが鳴り響いた。まだ、後者の方に残っていた生徒たちは、あ、やべ、などと、言いあいながら、駆け出てくる。（無邪気男児込み）

「はあい、じゃあ、二時限目はじめますよお…」

やはり、覇気のない叫び声で、レイナールはずうんとしていた。しかし、皆にはちゃんと聞こえているようで、キリツ、と整列をしていた。

「ええ、ではこれから二時限目、はじめあす」

だるうく声を上げるのは、うちのクラスの学級委員、アマツ・ヨウ。彼は遠い国からやってきたらしい。まあ、今の世界どの言語も魔法のおかげで聞き取れるため特に問題はない（因みに魔法名は、言霊。この魔法が出来てからは、生まれたその時に掛けてもらうらしい）そんなことより……さっき轢かれて転んですりむいた膝とお尻が痛い…。

「きりーつ…あ、ちがった。きょうつけえ…これから二時限目はじめまあすう」

ヨウ…同じこと言ってるよ。などとディアは思いつつ、皆がもう一度礼をしてしまっているのでつられて…と言うよりは、空気を讀んで礼をした。

「アマツくん…二回…言ってるよ?」

多分触れてはいけないであろう、部分に土足で踏み入った。

「…すみません。ちょっと、昨日の今日なんで…はい。」

アマツは小さく首を縦にさ下げ、謝る。アマツは今日調子が悪そうだ。顔も白くて、血の気がない。風邪でも引いているのか? 思ったが見る限りでは、咳もくしゃみも全くしていないし、たんに寝不足だろうか? 妙にぐだぐだとしている様子はまるでとり何かにとり憑かれてしまったような…。まあ、そんなことはないか…。昔そんな魔法があったが今は禁魔術として使用するには、聖・魔術議会で許可を得なくてはならない。…メンドクサイから、説明省略。

そんな、事を思っているうちに、授業は進み、棒立ちをしていたのはディアだけだった。未だにポツーンとしているディアの背中をロキが押して、授業が進行していることを伝える。

「なあ、ディア、今日のアマツなんか変じゃない? 血の気がないっていうか、精気がないっていうか…何かにとり憑かれているような…なんかとにかく変だよな?」

「ああ、今ちょうど僕も同じようなことを思った。確かにいつもの

アマツじゃない、つか、『昨日の今日』って何だよ…。」

うゝん。と二人は唸る。

「ユーリくん！？クロームくん！！！？早く始めてください！！！」

考え込む二人にレイナールが一喝、「しかし、あまり効果がない▼」無論、精気がこもっていないため。しかし、二人はまだ黙って考え込んでいた。

「……ディア：ロキ：始めて…」

ズウン、と冷たく暗い空気が、二人を襲った。声を掛けてきたのはアマツだ。

仕方なく初め、触媒を取り出す。ディアの触媒は、羽根（鷺）。ロキは、爪（自分の）だ。

「魔砲・矢狩」通称マホカリはお察しできるとおり攻撃呪文。複数の矢を同時に打ち出す呪文だ。（もちろん、魔力で形成されている）陣は四角四つを四角の中で描く。攻撃魔法は角ばった魔法陣を描くことが多い。理由は知らない。詠唱呪文は「か弱き空^{くう}を切る一つの矢よ、傷を負わせられないのか？ならば重複。複数の矢となり敵を狩れ！」だ。：呪文製作者表へ出ろ！！

攻撃系呪文は高級な触媒を使わないと、詠唱／発動した時、消滅してしまう。高級と言うよりは触媒自体にランク付けがあって、ランクに応じた回数だけ使用できる。たとえばディアの鷹の羽（根つき）はランクD＋ロキの自分の爪はEと言うように。

ランクはA＋／E－まである。それぞれの限界使用回数はDの触媒だと1／3回使える程度。Aだと100／一生使えるものまである。（因みにAの触媒は今^{たましい}は使用を禁じられている。Aランク以降の触媒はその生き物の生命自体を触媒にするため）

まあ、どうせ自分たちの階級的にCまでしか使えないし。うん。
そんなことより、さっきから、殺気立っている視線が怖い。アマ
ツ…怖いよ、アマツ…。

ディアとロキはやっと練習を開始する。

「『か弱き空を切る一つの矢よ、傷を負わせられないのか？ならば
重複。複数の矢血となり敵を狩れ！』」

バアン！！

大きな音共に、数十本の矢が一斉に打ち出される。標的にされた、
かかしに突き刺さる。同時にはなったため、耐えきれず、かかしが
宙を舞った。

「『まあ、こんあもんでしょ♪』」

ここまで、ディアとロキは息ぴったり。二人は顔を見合わせて笑
いあう

「『さっすが、俺たち！最強コンビ二人組！』」

ガシッと拳をぶつけあう。

それをマナはじっと見ていた「マナは仲間になりたそうにこち
らを見ている▼」

次々と生徒は成功していった。レイナールは「おしえることない
なあ、優秀だなあ：」と言いたそうな顔で皆を見ている。少しだけ
精気を感じられる安心した表情だった。

時間はあつという間に過ぎ、ドーンと大きなチャイムが授業の終わりを告げる。これで午前の授業はおしまい。次は給食または弁当を食べてから一時間という長い休み時間を経て、午後の授業が始まる。

「ディアー」

「クシュー」

「『一緒に食べようぜ!』」

そういう前にもうとくに二人は席について食べ始めている。ディアとロキにとってはこれが「いただきます」の役目を果たしているのだろう。

そしてやっぱり、視線が。「マナは一緒に食べたそうにこちらを見ている▼」

その視線に気づいた、ディアとロキはマナを呼んだ。

他のグループも食べ始めている。レイナールは「みんな…つくってもらっていいなあ」とぶつぶつ言いながらお弁当を食べている。

これが彼らの昼食の風景だ。

「『ごちそうさま』『』」

三人で、はもって、いった。

黒々とした視線に気づかずに

スペル・1 いつもの風景（後書き）

みにくいかなあ・・・うう

スペル・1 いつもの風景・2 (前書き)

今回は短めです、短いすだ

スperl・1 いつもの風景・2

実はこの一時間はとても暇なのである。何もすることが無い。遊ぶ相手はロキが居るけど…。

実に暇すぎたので、マナを写生写生をすることにした。

彼女は急に頼まれた事なのでとても戸惑っていたが、すぐに了解してくれた。

「あ、あの…」

「ん？」

「この休み時間内にお、終わりますかね？」

「んにゃー終わらないと思うけどね。ただ描きたいから。駄目かな？」

「い、いえ…ただ。そのうれしか…」

後半は聞き取れなかったけど、まあ時間は少ないし良い暇つぶしになるから僕はサッサと大きめのノートに線を描きこむ。

それにしても、マナの顔や体をこう…マジマジと見るのは久しぶりだ。知らないうちに胸なども、ちゃんと膨らんでいるようだし、腰つきも、僕とはまるで違う。ほんのりと湾曲したその腰の先には綺麗な足がスラッと伸びている。

何故だかわからないけど、ちょっとだけ、そう思う自分が恥ずかしく思えた。

「…ディ、ディア」

「ん？なに？」

「え、えーとね、久しぶりだね。」

「うん？、まあそうだな久しぶりだな。…随分可愛くなった。」

「え？」

「んでもないよ」

知らず知らずに本音が垣間見えた。なんなんだろうか、この気持

ちは。

ディアはノートに大きくマナの顔の輪郭を描いた。
するとそこに、便所からやっと帰ってきたロキがやってきた。

「あ、クシュおかえり。」

「おう！ディア」

ロキはディアが描いている絵を見つめ始める。

「にしてもディアは絵がうまいよな？なんでそんなん描けるんだ？
俺は、画力の才が無いからこれっポッチも描けないや…。風景画は
ともかく人物画なんかは最初からお手上げだよ（笑）」

ロキは何処からともなくノートを取り出して、それを広げてこう
言った。

「な？やばくね？」

それはもう本当にやばかった。風景はそこそこ描けてはいたが、
自分物は…ただの棒だ。

「あはは！」

「…ふふ」

ディアとマナは笑っている。ちよつとロキはその反応にムツとし
ていたが、事実なので飲みこんで一緒に笑い始めた。

「マナ…」

「は、はい？」

「なんもない。」

とても可愛いその笑顔を僕にも向けてほしい。なんてディアは思
った。

「…むむ、ディアはもしや…」

「ないよ。」

いらないクシュの突っ込みを僕はツツコミで返す。とりあえず、
掌底を物凄くかるめにお見舞いした。

「ぐふう」

ロキは情けない呻きを上げた。もちろん尻をだらしなく着いてい

る。

「「あはははは」」

ディアは笑うのを止めて、マナの写生を再開した。…が。
ドーン。

大きなチャイムの音が鳴り響いた。タイミングが悪い。けど、仕方ないのでディアは切り上げた。

スペル・1 いつもの風景・2 (後書き)

休み時間

スペル - 1 いつもの風景 - 3 (前書き)

らぶらぶ。・・・か

スperl・1 いつもの風景・3

ディアは二階に上がって、教室に戻った。

不思議なことに、さっきのチャイムで駆け上がった生徒たちで賑わうはずなのに静かだった。そう、ただ静かだった。

（おかしい……）

異様過ぎる雰囲気には足を止める。

あたりを見回すとロキがたっていた。ロキも異様過ぎる雰囲気に立ちすくんでいた。

「な、なあディア……なんか……変だ」

「うん。おかしい。みんな……居ない。」

そう。帰ったはずの生徒たちがそこには居なかった。

「なあ、ディア……午後の授業って……野外だっけ……？」

「いや、そんなはずないだって今日は……火曜日だ。野外の授業は午前中だけ……移動の授業も……絶対にない。」

二人で話していると、トイレにでも行っていたのであろう。マナがやってきた。

「あ、あのディアさん、ロキさん。……だれも居ないみたいなんですけど？午後の授業は移動でしたっけ？」

先ほどにも同じような質問をロキにされたので、ディアはめんどくさそうに少し顔をしかめてから、ロキにいったことを言った。

「移動はない。今日は火曜日だ。」

「ああ、そういえばそうですね……今日は火曜日でした。」

異変はそれだけではないようだ。先生たちの姿もない。本当だったら、もうチャイムもなっているはずなのに……チャイムも鳴ってはいなかった。

おかしい……おかしい……なんだよ。

ディアは焦っていた。理由がないはずなのに…なにか悪いことがあったのだと、悟っていた。

知っていた。この…いやな空気を。これは…いや、この黒々とした視線のような…アイツの…アマツの今日の雰囲気だ。あの何かに取りつかれたような。

黒々しい空気が漂っている。それはどんどん濃くなっているように感じとれた。

「と、とにかくだ。このやばい雰囲気は本当にやばい。…意味不明だな。えーと、とりあえず先生を探そう!」

ディアはマナとロキに言った。

「うん。そうだな「ですね」ガチでやばい。」

三人で頷いた。そしてはしだそうとした時。目の前を何かが通って行った。

——ヒヒ：——

そう、聞こえた気がした。

「おい、いまなんか聞こえたか…」

「ああ、聞こえた。」

「聞こえました。笑い声でしょうか?…気味の悪い笑い方です。」

ディアたちは階段を下りた。……階段?———そんなものこの学校にあったっけか?

ガタン!

「おうわあ!「おう!!!?」きゃあ!!!!?」

大きな音共に、ディア達は落下していった。

(つつ…。なんだよ…いてえな、なんで階段なんてもんがあるんだよ…)

ディアはそんなことを思いながらお尻をさする。

「……ここは、何処でしょうか？」

そんなこと聞かれても困るのはこっちだ▼

「ああ…いってえ…これ絶対けつにアオタンできたよ…つつ…。」

ロキはお尻をすりつつ、立ち上がる。——ろうとしたが、足を挫いていたようで、その場で倒れた。

「いっで!!!」

(………しばらくはそのままにしておこう。)

「……何処なんだろうな…ここは……。」

(だからしらん。)

三人は異様なまでに落ち着いていた。まあそうだろう。魔法がある。そんな世界だって言うのに…こんなことでは驚けなくなってしまうたのだろう。……それもそれでおかしいものだが。

(…ここ、マジで何処なんだろう。)

ディアはなやめる者のポーズをとり、しばし、考えた。下手に動くのアブナイ気がして三人は近くに寄り添っている。

ロキは、特に何もしていない。

マナは、ちらちらとディアの方に視線を向けていた。ジーと見たと思えば、そっぽを向いて、何処かに視線を落としたかと思えば、また、ディアに向けられていた。——忙しくなくごく。「落ち着け▼」(テンパっているわけではない。)

(二階…、下の階は…えーと、———)

ディアはマナの視線を気付かず独り考え込む。ややあって、右手をポンと叩いた。

「ここは…図書室の本だなの中だ。」

「へえ、「そうですか」」

「ええ？つめた！！？」

ディアはキョトンとしている。冷めた扱いに驚いたのだろう。
ロキは、まだおかしなポーズで固まっている。

「んでさ、ディアここどこー？」

（……さっき言ったんですけど……。）

「く、クシュ…僕さっき言ったんだけど。」

「へえ「そうですか」」

（………………。おうふ。）

「…話聞いてよ。」

「そうですね」

マナは曖昧に答えた。その視線はディアの足元らへんに固定され、その瞳に光は宿っていない。ぼーっとしている。薄暗くてよくわからないが頬が赤くなっているようにも見えた。

「…ま、マナ？話聞いてる？おうい！」

ディアは、マナ近付きその肩をつんつん、と、つつく

「ひゃあ！？」

マナは、飛び上がりその拍子で、ディアに抱きつく。

（…おお…や、やわらかす…。）

「あ、ごめ…ごめんなひゃい！」

再度、飛び上がった。その勢いでディアを突き飛ばしてしまう。

どん！

突き飛ばされて、驚いたディアは不本意に、マナの胸元の襟を掴む。グイ。

バランスを崩されたマナは、2秒ほどあたふたし、あっけなく前

に倒れた。…ディアの上に追いかぶさるように。まるで恋人を押し倒したような、体制で。

ふと、そんなこともすぐに薄れてしまった。

視線と視線がぶつかる。——その距離15センチ未満。唇は、もう触れ合ってしまったらしい程の…。密着しすぎた距離感。

マナは、心の臓が張り裂けるような錯覚を覚えた。

ディアは動けずにいた。

身体を動かせばあらぬところに触れてしまいそうで…。動くに動けない。——密着状態。

すると、そこにロキが、

「あらあら、お熱いですね…お二人さん…あれか？暗いから『本能が……』的なあれか？……別にいいんだぞ？俺は向こう向いてるからお好きにどうぞ？……ふんだ」

なぜか、起こってしまった

どうにかならないのかこの体制

スペル・1 いつもの風景・3 (後書き)

○
○
○

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2504/>

塔の下に飛べない竜と少年の話 （仮）

2010年10月10日18時57分発行